

評論の大切さ 屋良健一郎

「短歌研究」七月号の特集「わが評論賞のころ」では、同誌の評論賞の歴代受賞者が、受賞の頃のエピソードや短歌評論の意義について記している。論客たちの評論に対する想いがそれぞれ熱い。田中綾「戦後五十年の、あのころ」は恩師の菱川善夫に触れつつ「短歌評論の意義は、五十年後、もしくは百年後の読者が評価するものと思う。歌人とは、五十年、百年という長期的な視野でものごとを考える人々であることも、師から学んだ大切な点なのだから」と記す。未来の読者への信頼は、短歌史への信頼があったからこそ出てくる言葉だろう。評論の書き手としての使命感も感じさせる。岩井謙一「わが評論賞のころ」では、手軽に情報を収集・発信できる現在だからこそ、裏付けや論理性のある評論が重要だと説く。なお、岩井は自身が記してきた評論は「ある意味垂れ流し状態であり、読まれたという実感が無い」と言う。百年後へ評価を託す田中と、「書いても読まれないという状況」を危惧する岩井。どちらも、評論の書き手としての率直な感想であり、短歌評論の意義と現状を端的に示している。

「現代短歌新聞」六月号（六十三号）の菊池裕「社会詠不遇の時代に」は、二月のシンポジウム「時代の危機に立ち上がる短歌」に言及している。短い文章なので仕方ないと思うが、松木秀の歌に対するシンポジウムでの評価についてはやや乱暴な言及の仕方

だという印象を受けた。一方、菊池がシンポジウムで刮目すべき意見が乏しかったとする点は傾聴すべきだろう。シンポジウムに参加・登壇した名嘉真恵美子も、「歌壇」五月号の報告で「沖繩の現況に沿った、具体的な方法の可能性についての話は乏しかったのではないか」と記す。沖繩詠、社会詠の議論が深められなかったのだとしたら、そこにも評論を書く、読むことの不振という問題が影を落としているのかもしれない。沖繩詠についての評論がほとんど書かれていない状況、書かれていても読まれていない状況、そういうのがあるのではないか。先行する評論を踏まえて議論することで、ゼロではなく一や二からスタートすることができ、私達は前に進むことができる。評論の意義はそこにある。

「短歌研究」に話を戻すと、森本平「丁寧であること」は、「他人の発言を理解しようとしたのか。部分だけに過剰反応したり、結論先にありきで語ったりしてはいないか」と述べ、「作品や発言を丁寧に受け取り、自分もまた丁寧に話すこと」を評論の大切な点として挙げる。これは意外と忘れがちなことではないか。私事で恐縮だが、「歌壇」二〇一五年十一月号に記した文章のごく一部のみが前後の文脈を無視して引用され、沖繩の新聞や同人誌、日本現代詩人会と沖繩の詩人達が主催した講演会で批判された（「現代短歌」二〇一六年九月号、「歌壇」二〇一七年八月号の拙稿参照）。論者やマスコミにとつて都合の良い部分だけをピックアップし、都合の悪い事実は伏せての批判であった。そういう批判の在り方が当たり前になっていることに危機感を覚える。

いま一度、評論の基本に立ち返り、他者の文章を丁寧に読むこと、裏付けをきちんとして論を展開することを大切にしたい。